

街歩き・その2「古府中道と滝坂道」(上北沢 ～ 粕谷)

今回の街歩きは、昔から使われてきた街道の、(仮称)古府中道(現在の赤堤通り)と、滝坂道を訪ねましょう。
以前からこの辺では縄文土器などが発見されており、中でも旧石器時代のものまで掘り出されていることがわかりました。

①賀川豊彦「森の家」の跡

現在では想像も付きませんが、此处は小さな森になっており、平屋が5・6軒、森の中に建っていました。賀川豊彦さんと同士の方々の家でした。

②榎本学校

上北沢には、江戸時代から、いわゆる「寺子屋」が3つ有ったようです。

甲州街道沿いの「安楽寺」に有ったのは「高井戸塾」と言ったようですが、本村にあったのは「榎本塾」と呼ばれていたようで、明治になって学校制度が出来、明治5年に正式な学校と承認されたものが榎本平蔵さんの家に開設されました。明治12年には「上北沢村小学校」と成り、明治20年には、松原村・赤堤村の「松堤小学校」と合併して「松澤小学校」と成りました。

③古府中道と滝坂道について

経堂の「すずらん通り」を抜け、ヨーク・マートまで来ると、道路が2本に別れ、一本は八幡山駅に通じていますが、この道路は「大化の改新」の頃には既にあったと考えられる大変古い道で、武蔵の国の中心「府中」に通じる重要道路でした。現在の「赤堤通り」で、仮称「古府中道」と呼ばれています。

もう一方の細い道は、八幡山の八幡様の前を通り、仙川の桐朋学園の前から京王線を渡り現在の甲州街道の北側の「滝坂」を下って「府中」に通ずる「滝坂道」で、甲州街道完成以前にはこちらが専ら利用されていたようです。



④八幡山八幡様

八幡山の名前の起りである八幡様ですが、創建に関する情報は残っていません。

滝坂道を経堂方向から登って来ると、坂の上に八幡様が見えてきます。

鳥居の前で右から来る道と交わるのですが、南側に区道が新設された時の区画整理で、鳥居の前に直接接続しなくなり、滝坂道は原形を止めていません。

区画整理以前には、接続地点に、小じんまりとした古い「茶店」が残っていました。

右から来る道は、昔の上北沢村の中心を抜け、下高井戸駅前を通り、甲州街道に接続していますが、この間の名前は「滝坂北道」又は「北沢みち」と呼ばれていました。

地図を見ると、この「北道」と甲州街道とはホボ直線で接続可能で、上北沢方に抜ける「街道」の方が曲がっている事から、上北沢方向は、既に有った道に後から付けた事が推測できます。

八幡山の「山」には2説あります。

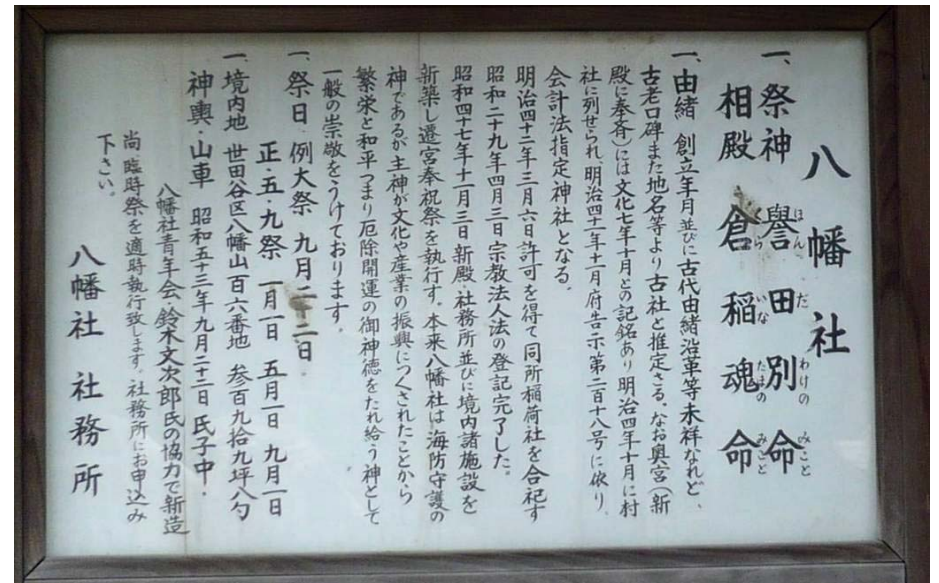
1. 滝坂道を登って来ると、山の上に八幡様が有る様に見える。
2. 八幡神社の北側一帯が井伊家の御用林地であり、林を「やま」と呼ぶのがこの地域の方言であった。

何れにせよ、八幡山が村らしい形態になったのは、1650年頃に、隣村の船橋村から島田家の先祖が移住し開墾を始めてからと言われています。

又、八幡様以前は、梶山(鍛冶山)と言われたそうです。

村の人口は江戸時代を通じてホボ18軒であったと言われています。当時の職業は、水田は無い為、畑作・林業・炭焼きでした。

「炭」は鍛冶屋にとって必需品で、この名前が付いた様です。



⑤八幡山遺跡

この遺跡からは縄文期の住居跡七箇所、江戸時代初期の炭焼き窯四基などが出土しています。

ここは、旧石器時代の遺物が見つかって話題となった廻沢北遺跡を中心とした、烏山川中流域の大型集落遺跡のひとつで、付近には下の一覧表にあげたような数多くの縄文人の生活の跡が残されています。

また一説では、烏山川が此の付近から幅が広がって、大きな沼地（仮称「船橋池」）を形成し、それが現在の小田急線、船橋、経堂間の「石仏公園」付近まで続いていた、と言われており、その北側の北沢川との間の尾根の上を、府中から現人見街道、三鷹市牟礼を通過して上高井戸に至り、赤堤通りに入る、仮称「古府中道」が延びていたという、当時の地勢と、集落や道路形成の関係が推測できる、興味あるポイントです。

[付近の主な遺跡 一覧]		<地区 印参照>	
「記号」	「遺跡名」	「種別」	「時代」
A	廻沢北遺跡	集落	旧石器、縄文（早～後）、近世
B	八幡山遺跡	集落	縄文（早～後）、中世・近世
C	八幡山稻荷前遺跡	集落	縄文（中）、近世
D	船橋本村北遺跡	集落	縄文（早～中）、歴史
E	丸下遺跡	集落	縄文（早～中）、近世
F	殿竹遺跡	散布	縄文（中）
G	粕谷八幡神社遺跡	散布	縄文（中）
H	烏山南原遺跡	集落	旧石器、縄文（前～中）、中・近世
I	新八山遺跡	集落	縄文（中）、古墳、近世
J	丸下北遺跡	散布	縄文



⑥蘆花恒春園

説明1：NPO法人芦花公園花の丘友の会

都立芦花公園（当時）の拡張エリアを「樹林公園」に計画していることを知った地域住民が、『草花が豊かな公園にしてほしい』という趣旨の要望書を東京都に提出、この花壇を地域住民で維持管理をしようということで、1996年10月に「芦花公園花の丘友の会」を発足させました。

現在では、毎月第一日曜日に開催の「花の丘フェスタ」や、公園内に「みんなのトンぼ池」や「やごの楽校」を建設、地域のコミュニティの場として活動が広がっています。

説明2：花の丘

NPO法人が2000平方メートルの5つの大きな花壇を地域住民や小学校児童の協力のもとに、整備・管理しています。

都立の公園を地域住民が運営管理する第1号となりました。

「花の丘」は、門外不出の15本の「高遠コヒガン桜」（長野県伊那市）や24本のしだれ桜に囲まれて、ピンクの強い「ヨウコウ」や『みみずのたはごと』にでてくる「次郎桜」もあって、桜の公園として年々見事になっています。

説明3：都立蘆花恒春園

昭和2年9月18日、蘆花は療養中の伊香保で亡くなり、没後10年を期して愛子夫人より公園として、敷地と邸宅が当時の東京市に寄贈されたのが、現在の都立蘆花恒春園の始まりで、昭和61年3月に東京都の史跡として指定されました。

蘆花記念館、当時の遺品を展示している母屋、梅花書屋、秋水書院、愛子夫人居宅、地蔵尊、竹やぶなどがあります。



説明4：植物、昆虫などの自然への影響について

此の周辺は環状八号線道路の開通により、それまでの田園風景は一変しました。

歴史的な資産として当時から残っているのは、「恒春園」の区画内と外周路の一部及び「墓地」だけで、「公園」部分の樹木はすべて田畑を埋めた後の植栽であり、「花の丘」の場所も元は田圃なのでそこに工事残土などを盛ったのでしょう。排気ガスの発生に加えて、これらが作られたことで、日照や通風が悪化し、今では、美しかった「恒春園」の樹林は見る影もなく荒れ果ててしまいました。

(昭和23年頃に描いた絵と比べるとその差は明らかです)

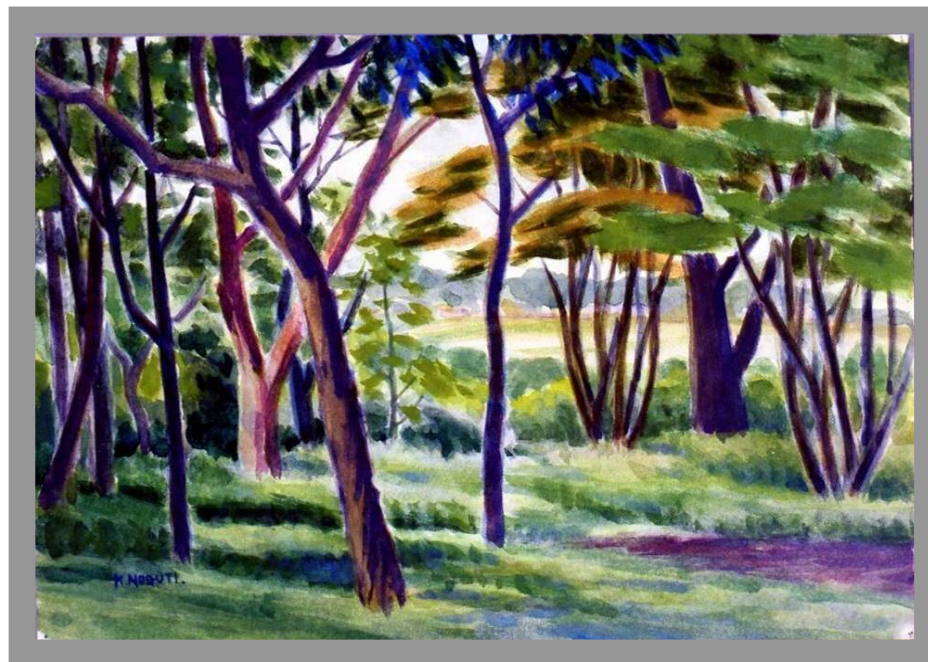
当然ながら、此の付近に多く生息し、後に国蝶に指定された「オオムラサキ」蝶なども姿を消して、生物相も大きく変化してしまいました。

説明5：徳富蘆花

明治の文豪、徳富蘆花は、『不如帰』『竹崎順子』『みみずのたはごと』『富士』などを執筆。

トルストイの影響で農耕のできる土地を求めていた夫妻は、明治40年2月に永住の地として粕谷に転居してきました。農耕生活といっても自ら言う「美的百姓」であり、西洋の野菜の種や農機具、高価な植木を購入したりと、村人には「解せない人」だったようです。それでも蘆花は、つとめて村民と親しくなろうとしていたらしく、粕谷八幡のお祭りに参加したり、寄附にも応じていたようです。また、世界旅行の後で、「日本が一番いい、日本の中でも粕谷が一番いい」と村人の前で話したそうです。

『みみずのたはごと』は、粕谷での生活を綴ったもので、当時の粕谷の風景や村人の様子なども描かれています。



野口健司氏作 「初秋」 (蘆花邸母屋前より東南方を見る)
1948.日本水彩画会 小品展 出品



説明6：徳富蘆花の粕谷に居を定めた経緯

諸説有りますが、以下は、「みみずのたはこと」からの引用です。トルストイに会って田舎暮らしがしたく成り、先輩の牧師に話したら、「玉川の付近に教会が有るがどうか」と言うので、牧師はいやだが、「玉川」と言うのに心が動き、兎に角行って見る事に為り、当日、案内者が来ないので、夫婦2人で「玉川の近くの千歳村」を探しに出かけました。当時の住居は「青山高樹町（現・南青山6/7丁目）」ですから、渋谷から「滝坂道」で「千歳村」には1本で行ける筈ですが、「玉川に近い」といはれた事から、三軒茶屋経由で尋ねながら行った為、予想以上に遠かった様です。

千歳村に着いて、ようやく教会を探し当てたところ、家主は「そんな話は何も聴いていない」と言う事で、先輩の牧師は何も連絡していなかったのです。教会は古くて汚いし、当てにしていた「玉川」は遠いし、景色もあまり良くなく、げっそりして帰って来た様です。それから2ヶ月ほど経つと、今度は、先の家主から、イロイロな物件紹介があり、結局、見晴らしが良かった事から、現在の土地に決めた様です。「トンボ池」のある現在の林は、当時は麦畑、「花の丘」は丘ではなく低い田圃でした。

説明7：蘆花と賀川豊彦

蘆花は明治40年に粕谷村に定住しました。それまで蘆花は青山に住んでいたもので、青山から真っ直ぐ滝坂道を歩きながら「この辺はどうだろうか？」と考えたかも知れません。

賀川豊彦は32歳の時、自伝小説「死線を越えて」を発表しベストセラーになりました。蘆花はこの小説に感激し、神戸の豊彦を尋ね、以来二人の親交が始まります。その後、蘆花の勧めで、豊彦は上北沢に居を移し、大震災後の東京復興に注力する事になるのです。

豊彦は当時の粕谷を次の様に描写しています；

私は粕谷のくぬぎ林が好きであった。松澤村から八幡山を通り抜けて、粕谷の鎮守に差し掛かると、武蔵野で無ければ感ぜられない美しい印象を受けるのが常であった。セピア色の肌の細かな土。もの寂びた鎮守の鳥居。繊細な雑木林の線。-----



⑦粕谷八幡・別れの杉

説明1：粕谷八幡

粕谷村は隣の八幡山村とは反対に、水田農業の村で、環状八号道路が通る以前は、京王線付近まで一面の田圃でした。又、環八の北側まで粕谷でした。環八の御蔭で粕谷は狭くなり、八幡山は広がったわけです。

蘆花の住んでいた頃の八幡様は、毎月1日に神主がやって来て、夜はお神酒を飲んで騒いだと言ひ、村の集会にも利用されていました。最近南側に芝生の広場が出来ましたが、以前は樹木も多く、あちこちに石仏が有ったりして、古びて親しみの持てたお宮でした。尚、蘆花の「みみずのたはごと」に出てくる「青山街道」「青山みち」は「滝坂道」のことで、蘆花にとっては、甲州街道より利用頻度が高かった様です。

説明2：別れの杉

蘆花は、この杉の場所で訪ねてくる人を迎えたり、見送ったりしたそうで、そこでの別れが最期となった知人もいたために、蘆花が『別れの杉』と命名しました。「当時の杉は枯れてしまい、氏子の手で2代目を植樹」と掲示には書かれていますが、土地の人の話だと実は現在の杉は3代目とも言われています。

⑧都営アパート（新樹苑そば）

このアパート群は比較的新しく、戦後は、都営の低層住宅群でした。戦争中は、六中（現新宿高校）の運動場で、グライダーの練習などが行われていました。



⑨大宅壮一・大宅文庫

大宅壮一は旧制茨城中学時代、米騒動の民衆蜂起を支持する演説を行い、放校処分と為っていますが、この時期最も強烈な影響を受けた人物として、賀川豊彦が有るといわれます。次の旧制三高時代には、賀川豊彦の活動に参加した事で、その後の社会科学への傾斜が強まり、25歳で編集発行した「社会問題講座」は大成功を収めます。1944年(昭和19年)には、豊彦の住む隣町の八幡山に疎開して来ます。

大宅文庫は、壮一逝去の翌年1971年に、「わが国唯一の雑誌図書館」として設立。

関心の有るキーワードで検索すると関係記事の有る雑誌が示され、10冊まで入場料¥500で利用できます。休日は、日曜祭日・年末年始。

⑩古府中道(赤堤通り)

大宅文庫前の「赤堤通り」と言われている道は、「大化の改新」の翌年(646年)に、多摩郡と荏原郡が出来たときに郡境になった道で有る事から、大変古くからの道であった事に為るわけです。昭和7年10月に「大東京市」が発足した際には多摩郡は含まれず、多摩郡だった千歳村・砧村が東京市に入ったのは昭和11年の事でした。

⑪研究所工事現場横を通り、

⑫都計道215を歩き、都営団地工事現場から3丁目に戻る。

< 説明文担当者 >

①②③④⑥説明6、説明7、⑦説明1、⑧、⑨、⑩の説明文：和田和典

⑤⑥説明4、⑦説明2の説明文：野口欣一

⑥説明1、説明2、説明3、説明5、⑦説明1：NPO法人芦花公園花の丘友の会

< 参考資料 > (世田谷区教育委員会 刊行)

- ・「世田谷の埋蔵文化財 一遺跡地図一」(2007年)刊行
- ・「世田谷の地名 [三田義春 編] 上巻 (1984年)、下巻 (1989年)刊行
- ・「世田谷の河川と用水」(1977年)刊行
- ・遺跡調査報告書「八幡山遺跡」(1979年)、「廻沢北遺跡」(1984年)、「八幡山稻荷前遺跡」(1995年)、「丸下遺跡」(2004年)刊行





街歩き・その2 『古府中道と滝坂道』 上北沢～粕谷

上北沢桜並木会議

2008. 5. 18



世田谷古地図

昭和4年(1929年)当時

